

意識と実体

— ヘーゲル『精神現象学』の目指すもの —

星 敏 雄

実体は主体 (Subjekt) であるというテーゼは、主に『精神現象学』の序文 (Vorrede)⁽¹⁾、同絶対知の章⁽²⁾、『論理学』の理念の章⁽³⁾に見つけることができる。このテーゼは体系叙述によってはじめて正当性を獲得する、ヘーゲル哲学の核心であるとヘーゲル自らによって明言される。とはいえ、このテーゼの意味するところは全く不明瞭に留まっている。このテーゼはこれほどヘーゲル哲学のもっとも根本的なものを語っているはずなのに、不明瞭であるとは、つまり解釈者たちによって共有される根本前提をも獲得していないとは問題である。そこで『精神現象学』の序文 (Vorrede) でのヘーゲルの議論を検討し、その意味付けを行いたい。

体系 (System) 叙述によってのみ、正当化される、ヘーゲル哲学の核心は、真なるものを、実体としてではなく、主体としても把握し、表現することにかかっているとヘーゲルは主張する。“Es kommt nach meiner Einsicht, welche sich nur durch die Darstellung des Systems selbst rechtfertigen muß, alles darauf an, *das Wahre nicht als Substanz, sondern ebensosehr als Subjekt aufzufassen und auszudrücken*”⁽⁴⁾

まず、この文章をどのように読むかということが、直ちに問題である。というのは、ebensosehr に対する nicht が、nur を欠いているからである。多くの翻訳者が、この問題に苦しめられた。普通は、nur を補って訳す。1910年の英記者、ベイリーは、not as Substance but as Subject as well. と nur を補わず訳した。⁽⁵⁾ 1939年、仏訳者、イポリットは、non comme sub-

stance, mais précisément aussi comme sujet⁽⁶⁾ と nur を補わず訳したが、1966年には、non seulement comme substance mais encore comme sujet と⁽⁷⁾ nur を補って訳した。1965年、W.カウフマンは、その英訳で、not as substance but just as much as subject と nur を補わず訳した⁽⁸⁾。日本語訳者は nur を補って訳している。翻訳者達の苦心ぶりが伝わってくるようだ。この nur の欠如は、ミスプリントではない。1831年春、ヘーゲルは、この部分に手を加えた。その際 welche sich durch die Darstellung des Systems selbst rechtfertigen muß という初版の文章に、nur が上記引用4のように、sich と durch の間に補われている。⁽⁹⁾ しかし我々が問題としている nur は補われていない。この nur の欠如は、G. シュミットの指摘に従えば、誤りでなく、「よく考えられた意図」なのである⁽¹⁰⁾。もし、nur を補えば、真なるもの体系は、まず、実体の体系 (例えば、スピノザ主義) であって、次に、主体の体系でもあり、二つの体系が並存してしまう。nur を欠くことによって、主体の体系が、実体の体系を、その中に包含して、一つの体系であることを示しうるのであるというわけである。このG. シュミットの読み方は、絶対知の章の次の文章とも合致する。“Ich ist nicht nur das Selbst sondern es ist die Gleichheit des Selbsts mit sich ; diese Gleichheit aber ist die vollkommene und unmittelbare Einheit mit sich selbst, oder dies *Subjekt ist ebensosehr die Substanz, Die Substanz für sich allein wäre das inhaltsleere Anschauen...*”⁽¹¹⁾、それ故、真なるものは、主

体 (Subjekt) である。主体はそして、実体でもある。

読み方に関して、第二の問題は、序文において、このテーゼが、「実体は、本質的には主体である」⁽¹²⁾とか、「真なるものは、本質的には主体である」⁽¹³⁾とか、又、「絶対者 (das Absolute) を、主体として表象する」⁽¹⁴⁾等と、言い換えられているということである。この場合、実体、真なるもの、絶対者の下で、同じ事柄が考えられているとして、よいだろう。以下、このテーゼを、実体-主体テーゼと呼ぼう。このテーゼの読み方は、多くの問題を持っている。しかし、テーゼの内容の理解から、その読み方も決まってくるであろう。事実、G. シュミット氏は、古代哲学の原理である実体と、近世哲学の原理である主体の、ヘーゲルの統一の観点から、このテーゼを解釈するのである。⁽¹⁵⁾

さて、このテーゼは、序文において、どのように、ヘーゲル自身によって説明されたのか。第一に、実体を動的に把握することが問題とされる。「生動的実体とは、真実には、主体であるような存在である。同じことだがその実体が、自己自身を定立する運動、又は自己の他となることを、自己自身と媒介することである限り、現実的である存在である。」⁽¹⁶⁾ このような、「自己自身を回復する同等性」又は、「他的存在に於て、自己の中へ反省すること」が、真なるものである。⁽¹⁷⁾ 要するに、他的存在の媒介による弁証法的運動である。第二に、真なるものは、自己の終りを、自己の目的として、はじめにおいて持つような、「円環 (der Kreis)」又は、「自己自身の生成 (das Werden seiner selbst)」である。このようにして、主体は、「目的」である。⁽¹⁸⁾ はじめが、目的であることによって、結果は、はじめと同じである。目的は、それ自身、動くものでありながら、不動のものである。「理性は、合目的的営みである」⁽¹⁹⁾ ともいえる。第三に、「真なるものは、全体である。」⁽²⁰⁾ 又は、「知は、唯、学として、又は、体系として現実的である。」⁽²¹⁾ そして、自己を展開し、自

己を精神として、知る「精神が学である。」⁽²²⁾ 等々である。以上の、ヘーゲルの実体-主体テーゼの説明は、このテーゼの理解を一層困難にさせるものではないだろうか。自己生成、精神、学、全体、体系、他在における自己同一、円環、媒介等のヘーゲルの術語が、実際、何を語らんとするのか、問題である。第一に、媒介について、ヘーゲルは、カント哲学を、物自体を背後に持つ、媒介の哲学として批判していた。⁽²³⁾ 又、否定については、悟性の規定は、分裂しており、否定的とされた。反省についても、主観的反省哲学は批判された。第二に、実体も、円環であるとされた。⁽²⁴⁾ 第三に、真なるものは、体系であるとされるなら、哲学は読経となるだろう。真なるものは、又、一冊の本、そのものとなるのだろうか。ヘーゲルにとって、真なるものは、哲学の Sache であった。⁽²⁵⁾ このテーゼの正当化の為に、ヘーゲルは、少なくとも、『精神現象学』一冊を要したのであった。このテーゼは、ヘーゲル哲学の在り方を示すものとして、肝心なものであるし、又、『精神現象学』を導く、主導的目標である。我々は禁欲的に、内在的にテキストに即して、このテーゼの意味するところを読みとってゆくより仕方あるまい。

このテーゼの次に、続いて、ヘーゲルは、次の様に言う。「同時に、次の事が注意されるべきである。即ち、実体性は、知に対する存在、又は、直接性である普遍的なものと同様に、知自身の普遍的なもの、又は、直接性をも、自己の中に含んでいるということである。」⁽²⁶⁾ つまり実体性は、知の対象にも、又、知自身にも、あると読める。それでは、知と知の対象にとりついている実体性とは何をいうのか。実体性は、「既に、出来上がったものとして、与えられている」⁽²⁷⁾ という点にある。ヘーゲルによると、古代と異なって、近世の哲学研究は、既に出来上がった、悟性形式に関わり、その固定的思想を流動化することにある。この固定化の放棄が、「思想を、概念に」換える。⁽²⁸⁾ 我々は、既に、

「表象」「熟知」の場にいる。表象、熟知の場は、実体性を形成する。実体は、「自己の中に閉じ込められ、実体として、自己の規定を保つ円環」である。⁽²⁹⁾ この実体は「悟性の分析」によって、「思想」という、「熟知された、堅固な、静止的規定」の場に既に出ている。この思想の流動化、それによって、思想を概念に換えること、それが、『精神現象学』の課題である。⁽³⁰⁾ というのは、実体は、悟性の分裂によって、分裂、固定性という死⁽³¹⁾に落ち入っている。精神は、悟性のこの死に耐え、この死の中で、自己を回復しなければならない。この自己回復の力こそが、「神通力 (Zauberkräft)」⁽³²⁾であり、先の、実体—主体テーゼの主体の意味である。⁽³³⁾

実体は、悟性によって、悟性規定によって思想として、出来上がったものとして、我々に与えられている。この悟性の規定は、しかし、分裂しており、固定的であり、そのようなものとして、実体性を持っている。この実体性、即ち、固定性と分裂を、流動化することによって、思想を、概念に換えなければならない。この力は、精神の力であり、主体である。この場合、知の対象の実体性の流動化という論点は、理解できるが、実体とか、悟性の分裂によって、ヘーゲルが何を考えていたのかは、一般的に言われたのみである。しかし、悟性規定の固定化と呼ばれているものは、例えば、自然科学の法則、又は、観察による対象規定の態度である。その実際の展開は、『精神現象学』を概観することによって知られるだろう。(具体的には C5A「観察的理性」)

以上は、知の対象の側の実体性についてであった。次に、第二の論点として知の側の実体性とは何であるのか。これは、認識主観の設定に関わる。しかし、その前に、ハイデルベルグの『エンチクロペデー』初版35節を、引用しておきたい。「さて、学の立場に立つ為には、次の諸前提を廃棄することが必要である。…、1) …悟性規定一般の固定的妥当の前提、2) 与えられた、表象された、既に出来上がった基体の

前提、…3) そのような、出来上がった、固定的述語を、なにかある与えられた基体に、単に関係付けることとしての認識の前提、4) 認識主観とその…客体が、…それらの各々が、それだけで、固定的で、真なるものであるという、(認識主観とその客体の) 対立の前提の、廃棄が必要である。」⁽³⁴⁾ 要するに、「学の立場」に立つ為には、1) 悟性規定、2) 基体、3) 認識、4) 主観と客観の対立の前提の廃棄が、必要なのである。『精神現象学』は、学への序論、導入であり、学の立場に立つことの正当化であった。それ故、この4つの前提の廃棄の議論を含んでいる。知の対象の側の実体性として指摘したことは、1) と2) に相当する。知の側の実体性は、3) と4) に相当するであろう。

実体を主体 (Subjekt) として表象する例として、ヘーゲルは、「神は、永遠である。又は、道徳的世界秩序である。又は、愛である。」⁽³⁵⁾を挙げる。この命題は、実体を、主語としているが、実体を主体として、表現していないといわれる。何故か。命題において、主語はそれだけでは、「空虚な声」であり、「単なる名前」である。⁽³⁶⁾「述語が、始めて、主語の何であるかを言う。」それによって、主語は充実する。ところが、上の命題においては、確かに、主語に「述語が付与」されているが、その際、これは、「主語について知るもの (即ち、認識主観) に属する運動によってであり、この運動は、主語自身に属していない。」⁽³⁷⁾ 主語は、「固定的点」であり、それに、他のところから取ってきた普遍的述語が、第三者的認識主観によって付与されている。実体は、神と名付けられて、確かに、主語として立てられている。しかし、それは、主体ではない。主語は、「固定的点」としてでなく、「自己運動」という在り方を取らねばならない。「この点に属する運動によってのみ、内容は、主体として、叙述されるだろう。」⁽³⁸⁾ ここで興味深いのは、神が第三者によって例えば愛として述語付けられるのみで、神自身が端的に愛であるとヘーゲルは何故しないかという

点である。つまりヘーゲルは神の自己述語付けを認めておらず、やはりヘーゲルは無神論者であると解釈せざるをえない。

しかし、ともあれ以上によって理解されることは、第一に、実体は、主語として立てられ、述語においてその意味充実をえるということである。実体は主体であるというテーゼは、実体は主語であるという主張を、まず、含む。この主張はアリストテレス哲学のものである。「近世的問題展開に全く触れておらず、その代りに、ずっと、古代に精通しているであろうような読者がいるとすれば、その読者は、この（実体—主体の）命題を、アリストテレス的と解するにちがいない。」⁽³⁹⁾（グロックナー）実体は、究極の主語であると、アリストテレスは定式化した。その他の範疇は、それに依存する述語的なもの、偶有的なものである。実体は、述語とならない主語である。この主語は主体、基体とも訳される、ヒュポケイメノン τὸ ὑποκείμενον である。それ自らは、決して、他のなにものか述語とならず、かえって、他のものが、これの述語であるものと定義出来る。アリストテレスにおいては、実体の探求は、存在論であった。存在である限りの存在、一般に存在するといわれるものについて、それが存在するといわれるゆえんを考察する学を、他の諸学に対して、第一哲学、又は神学として立てた。このような、実体の探求、存在の意味の問いは、形而上学として、哲学の核心的部門を形成してきた。存在を存在たらしめているものを、術語的に実体と呼ぶことが出来る。あるものに、実体を問うことは、「そもそも何であるか」と問うことであり、その答えは、そのものの本来的性質、本質 (τί ἦν εἶναι) である。本質の説明方式が、定義 (ὁρισμός) である。このような、存在への問い、実体探求、本質認識が、アリストテレス哲学の核心的部門を形成していた。この実体の第一義的なものが、基体（主体、主語）であった。⁽⁴⁰⁾ さて、この τὸ ὑποκείμενον は、中世になって、substantia, substratum, subjectum 等に

翻訳され区別して使用されるようになる。この subjectum が、近世になって、主観として使用され、意味の変容を受ける。下へ投げる (subjicere) の意味で、「根底におかれたもの」である subjectum が、特にカント以来、主観 Subjekt として、意識、自我、客観に対する主観として使用され、同時に、objectum の意味が変容する。我々の知性へ、「投げられ、差し出される (objici)」時、基体は、objectum であった。⁽⁴¹⁾ 即ち、観念が心的形象の内容としてあるということであった。ヘーゲルは、このような近世の変容に対して、実体は主語であるとして、アリストテレス以来の伝統へ戻らんとしているといえるだろう。ヘーゲルが、実体は主語であるというテーゼを正当化しようとする時、そこには、存在の問い、実体探求、本質認識としての哲学が、即ち、学としての形而上学が可能であると主張していたのではなかったのか。

実際、形而上学である『論理学』で探究されたのは、実体の定義、「絶対者の定義 (die Definitionen des Absoluten)」であった。⁽⁴²⁾ その最後の定義は、「理念」である。⁽⁴³⁾ 理念については、次の様にいわれる。「なにかあるものが真理を持つとしたら、それは、その理念によって真理を持つ。又は、それが理念である限り、それは、真理である。」⁽⁴⁴⁾ 「全て現実的なものは、それが、自己の中に理念を持ち、理念を表現する限り存在する。」⁽⁴⁵⁾ ヘーゲル哲学は、存在するもの (was ist) の概念的把握である。⁽⁴⁶⁾ この実体は、『論理学』と『精神現象学』では、現われ方が異なる。前者においては、諸契機が先行し、最後に実体を見い出せる。後者においては、実体である「全体が、把握されてはいないとはいえ、諸契機より先に存在する。」⁽⁴⁷⁾ 意識に対向するものとして、そして、それによって不可欠のものとして実体は現れる。それ故『精神現象学』においては、実体は、意図的に規定されないままになっている。

この実体—主体テーゼの議論、そして、思弁的命題の議論において、ヘーゲルは Subjekt を、

第一に、論理的主体として、第二に、認識主観として、第三に、思弁的命題の主体として、つまり、実体である主体として、三種類の意味で使っている。(J. イポリット)⁽⁴⁸⁾ さて、実体は主語として立てられ、述語において、『論理学』からいえば、その定義として、充実をえる。以上が第一の論点である。

第二に、この主題が自己運動をするという論点である。主語は、主語を固定的点とみなし、それに述語付与する認識主観の運動によって充足されない。むしろ、主語の自己運動による。主語は述語において完全に汲み尽くされる時、主語は述語に移っている。主語は述語の場面へ降りている。認識主観の運動は、主語に帰属していない。主語に属する運動によってのみ、実体は主体とし叙述されうる。認識主観の運動と実体である主語の運動が区別されるが、前者は、「意識の立場」に立つ知の運動、後者は、「概念の立場」に立つ知の運動と解しうる。意識と実体間の運動を、実体間の運動へ導くことが、『精神現象学』の課題である。「意識に於て、自我と、自我の対象である実体との間に生ずる不同は、実体の区別、否定的なもの一般である。…この否定的なものが、まず、自我の対象に対する不同とみなされるとしても、それは、同時に、実体の自己に対する不同でもある。実体の外で生じるようにみえるもの、実体に対する活動であるようにみえるものは、実体自身の行為であり、そして、実体は本質的に主体であることを自ら示すのである。実体がこれを完全に示した時、精神は、自己の定在を自己の本質と等しくする。…存在は…概念である実体的内容である。かくして精神現象学は完結する。」⁽⁴⁹⁾ 実体の探求は、意識の立場に立っては行ないえない。意識に立脚する議論においては、実体から意識へ、又意識から実体へ運動するだけである。実体が主語として立てられ、実体の定義が、述語において求められる時、その述語が、意識に属するのか、物に属するのかとする意識の立場に立つ議論は無力である。実体問題は、概念の

コイノニアによって、初めて論じうる。そうヘーゲルは主張する。

認識主観の設定は、このような意識の立場に立つことに由来する。認識主観の設定は否定される。「知はむしろ、区別が、それ自身に於て、運動し、自己の統一に戻るのを、唯ながめるだけの、見かけ上の無活動に存する。」⁽⁵⁰⁾ 知は「絶対知」又は「概念把握する知」⁽⁵¹⁾ として存立しているが、それは、世界の外の実体であって、対象と対向関係において、対象を実体とみなして関係する認識なのではない。これが、先のハイデルベルグの『エンチクロペデー』35節の3), 4) に相当する。主観と客観、存在と思考は、一重の統一として概念とみなされる。このような概念への高まり、そして、認識主観の設定の不可能の議論、実体が、意識にとって不可欠のものとして、要求され、主語となり、それに対して哲学的議論ができるということ、そのことが実体—主体テーゼのさしあたっての意味であり、又、『精神現象学』の役割と課題を示すのである。

注

- (1) PhG S. 19f
- (2) PhG S. 560f
- (3) 例えば、Enz 213Anm.『論理学』は、1810年代のものと、1830年代のものが区別される。前者は、第一巻、有論、1812、(G. W. F. Hegel, *Wissenschaft der Logik*, Erster Band, Erstes Buch, *Das Sein*, Faksimiledruck nach der Erstausgabe von 1812, hrsg. von, W. Wieland, 1966) と、第二巻、本質編、1813、第三巻、概念論、1816 (現行, Lasson版『論理学』II) であり、後者は、第一巻、1832、(現行, Lasson版『論理学』I) である。現在、予定されている、アカデミー版は、この配列に従うと予告されている。書かれなかった、未刊の1830年代の『論理学』後半部は、『エンチクロペデー』によって、その概略を知ることが、できる。cf. W. Kaufmann, *Hegel*, 1965, 1966, chap. IV, V いわゆる「小論理学」も重要である。
- (4) PhG S. 19
- (5) 英訳, trans. by. J. B. Baillie, Harper Torch Books, p. 80
- (6) 仏訳 trad. de. J. Hyppolite. I, p. 17

- (7) *Préface de la Phénoménologie de l'Esprit*, trad. par J. Hyppolite, p. 47 序文に関して、イポリットの訳は nur を補った訳と nur を補わぬ二種類存在する。
- (8) *Hegel: texts and commentary*, trans. by W. Kaufmann, Anchor Books, 1966, p. 28
- (9) W, III, S. 22; PhG S. 582
- (10) G. Schmidt, *Hegel in Nürnberg*, 1960, S. 207
- (11) PhG S. 560
- (12) PhG S. 24
- (13) PhG S. 53
- (14) PhG S. 22
- (15) G. Schmidt, 前掲書, S. 207
- (16) PhG S. 20
- (17) PhG S. 20
- (18) PhG S. 20
- (19) PhG S. 22
- (20) PhG S. 21
- (21) PhG S. 23
- (22) PhG S. 24
- (23) Enz § 415 Anm.
- (24) PhG S. 29
- (25) W VIII. S. 13, 14, 23, 25; WXS. 405; Enz § 119 Zu I; W-L, I S. 26, 31 等
- (26) PhG S. 19
- (27) PhG S. 30
- (28) PhG S. 31
- (29) PhG S. 29
- (30) PhG S. 31
- (31) PhG S. 29; cf. A. Kojève, *Hegel*, hrsg. von I. Fe-tscher, 1958, S. 210
- (32) PhG S. 30
- (33) PhG S. 30
- (34) 『エンチクロペデー』初版。現行のそれに含まれない、重要な事柄が含まれている。G. W. F. Hegel, *Sämtliche Werke*, hrsg. von H. Glockner, VI, 1956, S. 47-48
- (35) PhG S. 22
- (36) PhG S. 22
- (37) PhG S. 22-23
- (38) PhG S. 23
- (39) Glockner, *Hegel*, II. S. 431; cf. 出隆, アリストテレス哲学入門, 135 頁注 (4); 松本正夫, 存在論の歴史, 岩波講座哲学 VIII, 86 頁
- (40) cf. 出隆, アリストテレス哲学入門; 山本信, 諸問題の系譜, 講座哲学, 第一巻, (東大出版)
- (41) 桂寿一, 近世主体主義の発展と限界, 第一章, 一
- (42) W-L. I S. 59, 75 等; W-L. (初版) I S. 13 等; Enz § 85, 86, 87, 112, 161, 213 など
- (43) Enz § 213
- (44) W-L. II S. 407
- (45) W-L. II S. 409; cf. Enz § 213 Anm.

- (46) 例えば, W. X S. 405; W-L. I S. 46
- (47) PhG S. 558
- (48) J. Hyppolite, *Logique et Existence*, p. 181, 183, 185.
- (49) PhG S. 32-33
- (50) PhG S. 561
- (51) PhG S. 556

引用の略は次に従う。

1. G. W. F. Hegel, *Werke*, Suhrkamp ズールカンブ版全集—略号 W
2. *Phänomenologie des Geistes*, hrsg. von J. Hoffmeister, 1952⁶, ホフマイスター版—PhG
3. *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften*, in *Werke*, VIII, IX, X—Enz
4. *Wissenschaft der Logik*, hrsg. von G. Lasson, 1934², 1967 ラッソン版—W-L.
5. *Wissenschaft der Logik, Erster Band, Erstes Buch. Das Sein*, hrsg. von W. Wieland, 1966—W-L. (初版)
6. 精神の現象学, 上巻, 金子武蔵訳, 岩波書店, 1971; 精神現象学, 下巻, 金子武蔵訳, 岩波書店, 1952—各々金子訳上巻, 金子訳下巻